
殺し屋のココロ。

万里

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

殺し屋のココロ。

【Nコード】

N4236K

【作者名】

万里

【あらすじ】

殺し屋のミカゲは、任された依頼は完璧に実行するほどの腕前の持ち主。ミカゲは、仲間やボスにも認められたほど、すごい奴だった。

しかし、1つの依頼が、ミカゲに最悪な難題を突きつけた。

仕事を果たすのか、それとも、殺し屋の決まりを破って死ぬのか。

・・・待っていたのは、悲しい結末だった。

銃口を男に向ける。

「許してくれー！」

男が膝をついて懇願するが、そんなことお構い無しに、ミカゲは引き金を引いた。赤い血が飛び散るのを見て、彼女はそっとほくそ笑んだ。

「完了・・・」

頬についた赤い血を、ミカゲは拭った。

“殺し屋”と呼ばれる人間は、絶対に依頼人からの仕事を断つてはいけない。そして、絶対に実行しなければならない。

それを破る者がいたら、即刻消す。

人殺しの仕事は、相当の覚悟が要るのだ・・・。

「ミカゲ、このあいだもすごかったらしいじゃん」

「別に。たいしたこと無い」

すごいすごいと、ミカゲと同じ殺し屋のタケは感心する。

殺し屋になって2年。ミカゲは、全ての依頼を完璧に実行した。

そして、国会議員を暗殺するほどの腕前の持ち主だった。

タケがため息をつく。

「ミカゲはすごいけどさ、知ってる？アツキ、消されたって」

アツキとタケとミカゲは同期だ。タケが残念そうな表情をする。

「寂しいね」

「・・・そう？」

ミカゲには、誰かを思う気持ちなんて無い。それは、殺し屋である限り、必要の無いものだ。むしろ、あることは邪魔なのだ・・・。

暗い路地裏に呼び出される。

「ミカゲ。次の依頼だ」

そこに、ボスがいた。さつと差し出された紙をミカゲは受け取る。その資料を見て、ミカゲは愕然とした。

「これって・・・!」

「サカイ アサコ。次はこいつだ」

「アサコ・・・」

私の親友! どうして、どうして!

「知ってるだろう? 国の政策、人口減少政策。無差別に選ばれた人間を殺す政策の、対象者だ」

手が振るえ、涙が出てきた・・・。

「どうした? 依頼だぞ、ちゃんとやるんだ。・・・わかってるだろうな。やらなかったらどうなるか。お前もアツキのようになりた
いのか?」

そっくり残し、ボスは去っていつてしまった。

ミカゲは、立ち尽くした。頭は真っ白だった。

駅前の時計台の前。ミカゲは待ち合わせをしていた。

「ミカゲー!」

向こうからアサコがやってきた。

「アサコ」

「久しぶりだね! もー、寂しかったんだよ!」

その後、2人で遊びまわった。何年か前に戻った気がした。自分が殺し屋だということも忘れていた。

夕暮れが近づく。

「楽しかった! よかったよ、ミカゲに逢えて!」

笑い合う。最高の思い出になった一瞬だった。

いきなり、携帯の着信音が鳴る。ディスプレイには、あの名前が表示されていた。

「はい・・・」

「わかってるな」

「・・・わかっています」

「しっかりやれよ。さもないと、どうなるか」

電話が切れた。一気に現実に戻される。

先を歩くアサコの背中を見る。ミカゲの心には、重苦しい雲がかっている。

「ミカゲ？」

アサコが振り返り、笑って名前を呼ぶ。

「先言っちゃうよー！」

また、歩いていってしまふ。

腰に隠した銃に手をあてる。

アサコ、私はとっても幸せだった。

スツと銃を取り出した。

ボスがタバコを吸っている。そこに、ミカゲがやってきた。

「よお。仕事終わったのか？」

暗がりから現れた彼女の眼は、赤かった。

「どうした？」

「・・・できなかった」

「はあ？」

「殺せなかった」

ミカゲは、結局殺せなかった。そのまま、何も無いままアサコと別れた。

「ほう。わかってるんだろうな、どうなるのか」

「覚悟の上です」

「そうか、残念だ・・・」

ボスが言い終わらないうちに、銃声が鳴り響いた。

ミカゲの身体が、ゆっくり崩れ落ちていった。

タケは花束を手にし、1つの墓石の前に立っていた。

「ミカゲも、馬鹿だよなあ・・・」

ミカゲはボスの手で殺された。その後、アサコも殺された。依頼

は実行しなければならない。

「運命つてもものがあるんだよな。この世界に入ったことが、間違
いだった。けれど、それがお前の運命なら仕方の無いことだな」
タケは空を見上げた。

「あのあと、殺し屋は解散させられたよ。ボスは捕まったし、これ
でみんな安心して暮らせる」

風が音を立てる。

「ミカゲ？」

振り向くがそこには誰もいない。ただ、光が降り注いでいるだけ・
・。

「まあ、お前もやっと解放されたんだ。絶対そっちの世界で幸せに
なれよ」

もう一度吹いた風が、タケが持ってきた花の花びらを舞い上げた。

「じゃあな！」

タケは、空に向かって手を振った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4236k/>

殺し屋のココロ。

2010年10月28日03時01分発行